

令和二年 第五回

白井あさぎ七回忌追善

春青能

半蔀

立花供養

青木道喜

舞囃子田村 青木真由人
仕舞弱法師 片山九郎右衛門

能 半蔀 立花供養

夕顔の霊 青木道喜
雲林院の僧 宝生欣哉

能方 松本薫

大鼓 河村大 笛 竹市学
小鼓 吉阪一郎

ほか

令和二年四月十一日(土)

午後三時開演(茶席あり)

冬青庵能舞台 京都市中京区両替町通夷川下ル

主催 春青能実行委員会・青木道喜・白井孝明

無観客公演・ライブ配信実施
www.touseian.jp/web/

白井あさぎ七回忌追善 第五回
春青能

午後三時開演

舞囃子 田村 青木真由人

大鼓 河村 大 笛 竹市 学
小鼓 吉阪 一郎

地謡 大江広祐
浦田保親
大江信行

仕舞 弱法師 片山九郎右衛門

梅田嘉宏
味方 玄
分林道治

午後三時半過ぎ頃

夕顔の女の霊 青木道喜

能 半部 立花供養

雲林院の僧 宝生欣哉

寺に仕える男 松本 薫

大鼓 河村 大 笛 竹市 学
小鼓 吉阪 一郎

立花 山村御流流松朋会・上村錦昭師

地謡 大江広祐
浦田保親
片山九郎右衛門
分林道治

後見 梅田嘉宏
味方 玄
大江信行

午後五時頃終了予定

「春青能」こあいさつ

はじめまして。白井と申します。
四月十一日に、春青能「半部・立花供養」の公演を主催いたします。

私事で恐縮ですが六年前、一人娘が十八歳で他界しました。公演日が祥月命日にあたります。恥ずかしながら、先行きの望みを失いかけてました。その折、学生時代にご指導いただいた立命館大学能楽部講師、青木道喜師の能に触れる機会を得ました。

生前の娘も一度観ることがあり、わからないなりに、興味深いとの感想を漏らしたものです。様々な想い出とあわせ、深く感じるころがありました。

同じく師のご指導を受けた妻は、「道喜先生の能を観て、固まっていた心がとがされたよう。これからも、この気持を味わえるなら生きる甲斐がある」と述べました。

亡子追善のための演能を師に相談したところ、ご快諾をいただき、諸方面のご協力も得て、「春青能」開催に至りました。さまざまな縁に恵まれ、本公演が第五回となります。

青木師の簡素で気品ある舞が、春の一刻を忘れられないものにしてくれることと思います。また、忘れ難い人を偲ぶ一つの機会になれば幸いです。皆様をお誘い申し上げます。

令和元年秋 白井孝明

観世流能楽師 青木道喜

昭和二五年京都市生まれ。青木祥二郎の長男。父及び九世片山九郎右衛門（幽雪）に師事。重要無形文化財総合指定者。京都市中京区に冬青庵能舞台を構え、京都を中心に意欲的な活動を展開。宮沢賢治生誕百年記念新作能「永訣の朝」、親鸞上人五百回御遠忌記念能「蓮如」、信州明科オリジナル作品「犀龍小太郎」「恋の龍門洞」、新作狂言「鹿踊りのはじまり」「はしくれ法師」「ものぐさ歌太郎」を書く。海外公演にも意欲的。

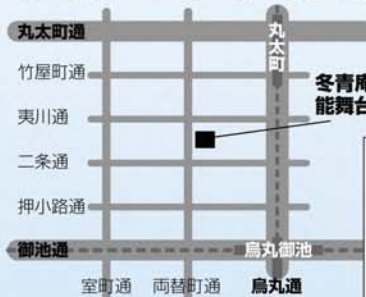
平成二五年には能「泣不動」を復曲。京都の清浄華院で四〇〇年ぶりに上演。平成二八年には高浜虚子作の能「鐵門」の復曲にも携わり、シテを演じる。京都市新人芸術家選奨、安曇野文化大賞を受賞。



令和2年
4月11日(土)
午後3時開演
冬青庵能舞台

京都市中京区両替町通夷川下ル 地下鉄烏丸線「丸太町駅」より徒歩5分 / 市バス「烏丸二条」より徒歩3分

会場へのご案内



www.touseian.jp/web/

無観客公演・ライブ配信実施

www.touseian.jp/web/

入門編

「能」の見方 まったく……またはほぼ初めてのの方に

発展編

「能は難しそつで……」とよく言われます。そのとおりです。「それでも機会があれば一度……」と、せっかくなこれを手に入れてくださった方のために、難しい点と、初めて見るときのヒントを記します。

難題1 言葉がわからない

↓全部はわからなくても、要所要所とキーワードを知っておけばよいでしょう

室町時代の言葉ですから、そのままではわかりません。まず、左の解説に目を通してください。次に、全部理解する必要はない、と割りきってください。重要ないくつかの言葉「夕顔の花（発音は「いうがお」）」「白き花・扇」「半部（はじとみ）」「源氏の中將」「立花供養（りっかくよう）」「五条……」などを聴きとるだけでもわかりやすくなります。「半部」の物語そのものは、ごくシンプルで、その場の「雰囲気・情緒」を言葉から受け取るものと考えてください。なお、文章そのものは、インターネット（ホームページ）「謡曲を読もう」に全文と現代語訳でも読むことができます。また、源氏物語「夕顔」が素材なので、原作の現代語訳を読むだけでも、作品世界に入りやすくなります。

難題3

舞台に何も無さすぎてわからない

↓能面と衣装だけでもなかなか楽しめます

舞台があまりにがらんとしているので驚く人もいます。場面や情景は、原則として装置を使わず、言葉で表現されます。しかし、「難題1」にも書いたように、要所要所がわかかってイメージがわけばよいので「こんな感じ」で見始めてもよいでしょう。本公演では「立花」「半部を備えた家屋」が配置されます。装置とは反対に、能面と衣装は凝りに凝っています。面は、「難題2」と同じで、じっと見つめ続けること、わずかな角度の変化で表情が動くのが楽しめるようになります。「わかりやすく誇張して伝えてくれる」のではなく、こちらからじっと見つめて楽しむものと考えてください。女性役の衣装は特に、豪華で手間のかかったものが多いので、柄や仕立て、色合いなど、目のごちそうとして楽しめます。

難題4

音楽や舞踊が不思議でわからない

↓基本パターンを知ると親しみやすくなります

ここでも「慣れ」が大切です。コツがあります。能の音楽と舞踊の仕組みは意外にかんたんです。音楽は原則として「七・五調」の十二文字が一単位で、これを伸ばして十六字相当にして、ここに打楽器が八回「あいの手」を入れます。リズムのパターンはいくつかに限られています。また、メロディーにも一定のパターンがあるので、音の動きに慣れれば、言葉も聴きとりやすくなります。能は「いつ・どこで・誰と誰が」やっても上演しやすいように規格化された部品で構成されています。上演しやすいということは、つかみやすいということです。たとえば、本紙の反対面で紹介している冬青庵能舞台のホームページで動画（仕舞）を見れば、基本的な所作と音の動きはつかめます。そして、ある意味ワンパターンともいえるものだからこそ、出演者はその微妙な変化や表情を与えることに心を砕き、稽古に没頭します。結論としては「同じに見えるものの中の微妙な違いを楽しむ」ということです。少し手間をかけて慣れると、ずいぶん親しみが感じられるようになります。まずは詩・音楽・舞踊・面と衣装などのどれか一つ、興味が感じられたものに注意深く接してみることをおすすめします。

「芸」の見方 マニアへの道？

芸能・芸術の楽しみは「観比べ・聴き比べ」にあることは事実です。そこで、よりマニア的(?)な方のために、本公演の主演者の芸風に関する短評を掲載します。五年ほど前に書かれたものですが、ご参考に。

青木道喜の芸風について「簡素で力強い」と評したことがある。精確で厳肅な楷書風。ところが、「何かが大きく変わったのでは？」という場面に遭遇した。それについて書く。初夏、京都新能の半能「半部」。舞台を滑る夕顔の精は、空気を切らず風に逆らわず、ふわりふわりと動いている。指す手や扇が、風の動きに枝や葉がなびくような印象を残す。その結果、名状しがたい静けさが舞台に広がる。それにあわせてこちらの呼吸まで静まり返っていることに気がついたら、もう序之舞が終わっていた。

なぜこのような印象を受けたのだろうか。上演中には不思議な何かが目前を過ぎるようなものだったか、記憶を探り、ある程度のことかわかった。

もともと青木の舞は精確さが身上。物足りないことはまずないが、時に定規で測って方眼紙に描いた「優美な見本」みたいなものを見せられることもあった。当夜観たものは違った。ほんの少々——物理的な時間で測れば、コマ数秒またはもっと微細かもしれない——「ゆらぎ」じみたものが舞に認められた。たとえばスミ柱に進んで止まる時、全身の各部位が整然と狂いなく静止するのがこれまでだったのが、止まるその瞬間、次の動作に進む部位とためらう部位にずれが生じている。弛緩ではない。結果、動くようであり、止まるようであり、ゆるやかに進むといった表情が生まれる。いつ止まってもいつ動きはじめたのか判然としない。まことに自然な「移行行き」を見ることがになる。日本人がこっそり好む人工と自然の接する場所にある雲、とでもいったものだろうか。

そして、観能の幸福をさらに大きくしてくれたのは、新能ならではの「風」である。静かに移りゆく舞いの袖を風が波打たせるのを見て、胸がいっぱいになったのは私だけではない。舞い終わって後、半部の下に見える衣の裾がかすかになびいた。この余韻がまた格別だった。

ごく小さな違いかもしれないが、人間は視覚が特別に発達した生物だから、その違いは大きな味わいの差になる。

「切り詰めた動作」が青木の芸の持ち味であるということから、そのわずかな身体的感覚のちがいにどれほどこだわって鍛錬を重ねたのだろうかと思像してみよう。何十年かけて数ミリ、コマ数秒かもしれない。

見方によっては何たる時間の浪費、ともいえる。しかし、浪費と蕩尽こそ芸能の本質である。その成果が、世阿弥が説く「藤に花の咲く」ような境地に近づきつつあるとしたら、観客としてその道のりを賞味できるとしたら、観客としてこの上ない欲びである。

相生次郎(ジャーナリスト)



標準編

「半部」の見方 経験がある方は「じ」から

前半

立花供養を終えた僧の前に謎の美女が

- 雲林院の僧が「立花供養」を行うと宣言する
- 僧は能力(寺に仕える男・狂言の役者が演じる)を呼び、立花供養の支度を命じ、能力は触れて回る
- 立花のもとに不思議な美女が現れ、白い花を供える
- 僧が不思議に思っ、女に素性を尋ねる
- 女は「私のことは五条に來ればわかる」と言い、花の影に隠れるように消える

僧が「立花の供養」を行うと宣言し、人々が集まり、そこに不思議な女性が現れ夕顔の花を供えます。僧が何者かと問うと、源氏物語の「夕顔の女の霊」および「夕顔の花の精」を暗示するような謎めいた言葉を発し、さらに、夕顔の女の住んでいた五条(京の南部)に來ればわかると云うと、花の影に消えてしまいます。ここまでが前半で、僧・能力・女のやり取りが物語を進めます。かろうじて劇らしい筋があります。

後半

「夕顔」が半部から現れ、舞う

- 僧は五条に着き、能力から「夕顔の女」の物語を聴く
- 僧は夕顔の女を弔うため、経を唱える
- 半部のある館の中から女の声が聞こえ、女の姿が半部を開けて現れる
- 夕顔の霊が源氏との逢瀬を懐かしみつつ、語り舞う
- 夜明けが訪れ、女の霊は消え、全ては僧の夢であったと知れる

後半には筋といえるようなものはほとんどありません。一行でお願いします。夕顔の女の霊が現れ、源氏との思い出を語り、舞い、消え失せた。後半は、劇のように見えて、実は僧の夢だったという流れです。夕顔の女の霊が源氏との思い出の地、五条に現れ、語り、舞います。「半部」という作品そのものが、この「舞の情趣」を味わわせるために作られているといってもよいかもしれません。

1~2 僧が立花供養を行う

前半

「半部」は優美な女性の舞を見せるという点で、最も「能らしい能」のジャンルに属します。「夕顔」とは、若き日の源氏が愛した女の名。前半部分から源氏との恋を暗示する言葉が多く並びます。なお、前半と後半の間に、狂言役者によって、源氏物語の筋が説明されます(6)。古文ですが比較的わかりやすいので、じっくり聞いてください。

10 夜が明け半部消える



9 夕顔の女の舞



後半

7 夕顔の女の霊が半部を上げて出る



3~5 不思議な女が白い花を供え消える



この作品は、ほのかで淡い情趣を特に重視して作られています。源氏物語では、夕顔の女は唐突で恐ろしい死に見舞われます。この場面では源氏の恋人の一人、六条御息所の嫉妬で呪い殺されたことも暗示されます。源氏の落胆や動揺も大きなものです。ところが能「半部」はそのような影の部分に注意深く避け、夕顔の恋の美しい思い出だけを柔らかな筆致で描きます。そして、源氏との恋を物語る最後に、大切な和歌が引用されます。折りてこそそれかとも見ぬ黄昏にほのほの見えし花の夕顔

源氏物語では初句は「寄りてこそ」です。能では「源氏があの夕顔の花を折れと仰った」と語る部分に合わせて書き換えたのかもしれませんが、「折りてこそ」の句に導かれ、夕顔は静かで緩やかな「序之舞」を舞います。時間が止まったような見どころです。気がつけばもう明け方。美しいものにも終りがあることが、「鳥の声」「鐘」「東雲」などの言葉で示されます。能の多くに、このような時の移ろいの切なさが描かれています。また半部の内に入りてそのまま夢とそなりにける夕顔の舞も、すべて僧の夢だった——明け方のこの切なさはまた、平安時代の恋人たちが朝、逢瀬の終わりに感じた別れの悲しさと重なり合って響くように感じられます。